

# 日本人留学生の異文化接触とアイデンティティ

## — 留学前、留学中、帰国後のイメージ分析を通して —

Intercultural Contact and Identity of a Japanese College Student

— Image Analysis of Pre-departure, On-site and Post-study Abroad —

中川 典子\*

Noriko Nakagawa

本稿では、独立行政法人日本学生支援機構の短期派遣奨学金制度により、2010年3月から1年間、米国西海岸の大学に留学した日本人大学生を対象に実施したインタビュー調査を通して、留学前、留学中、帰国後の、「留学」および「自分自身」という2つのキーワードに対するイメージの変化を探索することにより、異文化接触が調査対象者にもたらしたアイデンティティの変容について考察した。

キーワード：留学、自分自身、イメージの変化、アイデンティティの変容

### I. はじめに

米国シンクタンクの「国際教育研究所」(Institute of International Education)の報告によると、2010～2011年にかけて世界220カ国から総数723,277人の留学生がアメリカの大学・大学院に在籍しており、これは、前年比5パーセント増を示している。その内、アジアからの留学生は461,903人で、国別留学生数上位10位の半数を占めていた<sup>1)</sup>。一方、1999～2000年にかけて、米国の大学・大学院に46,872人の日本人留学生が在籍していたが、約10年後の2010～2011年にはその数は21,290人に減り、これは、前年比のマイナス14.3パーセントに相当し、国・地域別では世界で第7位となっている<sup>2)</sup>。日本は1994-1998年まで全米の留学生総数の国別で第1位を占めていたが、その数は年々減少傾向にあり、原因の1つとして日本人学生の「内向き志向」が指摘されている<sup>3)</sup>。他方、日米教育委員会による過去5年間の調査では、日本人がアメリカ留学を志す理由として、「国際性を身に付け、視野を広めたい」、「アメリカの大学で学ぶ経験がしたい」、「英語力を向上させたい」、「さまざまな人々との交流を通じて、ネットワークを築きたい」、「留学経験を将来の仕事に役立たせたい」が上位5位を占め<sup>4)</sup>、希望を抱きながら、真摯に米国留学を目指す若者たちが存在することも否めない。

昨今の米国をはじめとする日本人留学生数の低迷の原因の1つとして、「内向き志向」とともに、

---

\*流通科学大学サービス産業学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町3-1

日本の景気の低迷にともなう個人家庭の家計の逼迫が考えられるが、公的機関や、大学では海外の大学あるいは大学院への留学を目指す日本人学生を支援する奨学金制度を提供し、留学の後押しをしていることも事実である。その一例として、文部科学省の外郭団体である独立行政法人日本学生支援機構は、「留学生交流支援制度（短期派遣奨学金）」により、日本の大学、大学院、短期大学、高等専門学校（第4年次以上）に在籍しながら、3か月から1年間、諸外国の高等教育機関に留学する学生を支援する制度を提供している<sup>5)</sup>。

筆者は、上記の日本学生支援機構が提供する助成制度により、2010年3月から2011年2月までの1年間、米国西海岸の大学に留学した日本人学生1名を対象に、「留学」、「自分自身」、「日本・日本人」、「アメリカ・アメリカ人」という4つのキーワードに対するイメージの変化を、留学前、留学中、帰国後の3度に渡って調査した。本稿では、上記のキーワードに対する調査対象者のイメージの変化を分析することにより、調査対象者が留学前から帰国後までに経験したアイデンティティの変容を探索し、調査対象者にとっての今回の留学の意味について考察したい。以下では、まず、「アイデンティティ」というテーマを扱う本稿の理論的立場を明確にした後、異文化接触と留学生のイメージの変化をテーマに扱った先行研究を紹介する。

## II. 本稿における理論的枠組み

エリクソン<sup>6)</sup>は、アイデンティティを「ego」（自我）と「self」（自己）の二つの側面から考察している。自我アイデンティティ（ego identity）とは、自我の心理・社会的機能といった統合力に着目したものであるのに対し、自己アイデンティティ（self identity）とは、社会的な役割や他者との関係において承認されることで確立されるような側面を示している。言い換えれば、前者は意思決定を行う能動的な側面としてのアイデンティティであり、後者は他者との関係の中で決定される受動的な側面としてのアイデンティティである。一方、ミード<sup>7)</sup>は、「自己」（self）を“I”と“me”に区別している。“I”が個人の内発的反応を表すのに対して、“me”は他者の態度を内面化し、他者がじぶんに期待している役割を取り入れることによって形成される自我の社会的側面を表している。ここで、自我アイデンティティは“I”に、自己アイデンティティは“me”に相当すると考えられる。

エリクソンは、アイデンティティを統合され、環境の変化に依存しない固定的なものとして捉えていたが、近年、アイデンティティを「環境や対人関係」の中でダイナミックに捉えようとする視点が見られるようになった。例えば、原<sup>8)</sup>は、アイデンティティという用語は様々な側面から取りざたされ、異文化接触研究においても使用されるが、便宜上のものであるとし、全ては自我アイデンティティに集約されると述べている。そして、異文化接触とアイデンティティとの関係について語られるとき、民族的アイデンティティ、文化的アイデンティティなどの社会的な「アイデンティティ」の概念が、しばしば、人間存在の全体であるかのような扱われ方をされ、この

ような社会的アイデンティティが自我アイデンティティや自己アイデンティティと独立しているかのように論じられることへの危惧を指摘している。なぜなら、社会的アイデンティティはあらゆるアイデンティティの1つに過ぎず、必ず自己との関係において問題が浮上するからである。本稿におけるアイデンティティの捉え方はこの原の見解を支持するものである。異文化体験を考察する際、文化的適応のプロセスを検討するだけでは十分とは言えず、自我アイデンティティの構築過程に着目する必要があると筆者は考えている。つまり、「アイデンティティは、個人の自己価値の存在証明を求める欲求と環境との相互作用の過程から創出される」(p. 30)<sup>9)</sup>との立場に立っている。

他方、意思決定を行う能動的側面としての自我アイデンティティと、他者との関係の中で決定される受動的側面としての自己アイデンティティの問題に関し、一般的にアイデンティティという場合には、自我アイデンティティを意味することが多い。新井<sup>10)</sup>は、濱口の間人主義の概念を引用し、西洋人のアイデンティティには内面的一貫性、すなわち自我アイデンティティがあるのに対し、日本人には自我アイデンティティが希薄であると指摘している。さらに、日本人は、アイデンティティの一貫性をウチにではなくソトとの関係に求める傾向があるため、ソトとの関係に変更を迫られると、アイデンティティの一貫性にも変更を加える必要性を意識する。さらに、新井は教育の課題として、異文化接触が重視される所以がここにあると指摘している。異文化接触の状況は、肯定的な意味でも否定的な意味でも、個人にアイデンティティを意識させる良い機会を提供する。この意味でも、異文化接触を通じて、個人のアイデンティティがどのような影響を受け、変化するかに着目することは重要なテーマであると思われる<sup>11)</sup>。

以上、本稿における理論的枠組みについて検討した。以下では、留学生のイメージ分析をテーマにした先行研究の代表的なものを紹介する。

### Ⅲ. 留学生のイメージ分析に関する先行研究

本稿の目的は、留学に関するキーワードに対する調査対象者のイメージの変化を分析することにより、異文化接触が個人のアイデンティティに与える影響を探索することである。留学生のイメージ分析については、異文化接触状況における異文化適応との関連から、これまで多くの研究が実施されており、対ホスト国のイメージが留学生の適応度に大きな影響を与えることが指摘されている<sup>12) 13) 14) 15)</sup>。茂木ら<sup>12) 13)</sup>は、3ヶ月間の米国研修に参加した学生188名を対象に、「日本」、「アメリカ」、「人間関係」、「現在の自分」という4つのキーワードに対するイメージについて、渡航前、研修生活1週間目、1ヶ月目、帰国後1週間目の4度に渡り測定した結果、滞米経験が日本に対する過小評価と米国に対する過大評価が大幅に修正され、イメージがネガティブになった者ほど身体的な変調や勉強について困難を感じていたことを明らかにした。岩男と萩原<sup>14)</sup>は、在日留学生の対日イメージについて調査を実施し、「勤勉性」および「信頼性」は出身地域に

関わりなく共通して高く評価されるが、「親和性」については、欧米系よりもアジア系留学生の方が評価面で厳しく、「先進性」については欧米系留学生の方がアジア系留学生よりも厳しく評価していることを検証した。葛<sup>15)</sup>は、留学生を対象に面接調査を行い、来日前の対日イメージおよび来日後のイメージ変化が適応に大きな影響を及ぼし、来日前の対日イメージが良く、来日後もポジティブに変化する者ほど適応度も高いことを明らかにした。また、横須賀<sup>16)</sup>は、対日中国人留学生と日本人留学生を対象に、日本人学生あるいは留学生に対するイメージを探索し、その結果から、合同授業での直接的な異文化接触は接触前に抱いていたイメージを確認、検証し、より明白にすることで維持したり、修正したりする刺激となったと報告している。

本稿で調査手段として用いる PAC 分析を使った異文化適応（再適応）や異文化接触をテーマにした研究がある。井上<sup>17)</sup>は、カウンセリング課程において、「留学生生活」を刺激語として、来日 1 年目の留学生生活のイメージの変化を PAC 分析により検討した結果、文化受容態度が留学生の適応に影響することを明らかにし、文化受容態度を重視した留学生カウンセリングの重要性を指摘している。また、末田<sup>18)</sup>は、PAC 分析を使って、日本人派遣留学生の留学前と帰国後の米国に対するイメージの変化を検討し、留学前、帰国後、あるいはその両方の時点における滞在国に対するイメージ分析を異文化トレーニングの手法に適用する可能性について検討している。最後に、横林<sup>19)</sup>は、日本に長期滞在する留学生 2 名を対象に、3 度に渡る PAC 分析調査と面接によるライフヒストリー調査を行い、日本での大学生活に対するイメージの変化と彼らの適応過程との関係を探した。

以上のように、滞在国に対するイメージの変化を文化適応の観点から分析した研究は多々あるものの、滞在国のみならず、訪問国や自国、自分自身や留学に対するイメージの変化と異文化接触における自我（自己）アイデンティティとの関係に焦点をあてた研究は希薄である。

## IV. 研究方法

### 1. 調査対象者

今回の調査の対象となったのは、日本学生支援機構が提供する「留学生交流支援制度（短期派遣奨学金）」の助成を受け、2010 年 3 月から 2011 年の 2 月にかけて、筆者が勤務する A 大学の提携大学である米国西海岸にある B 大学に留学した学生（以下、C と称す）である。この制度は、所属大学で一定以上の学業成績を修めた留学希望者から 1 名を選抜し、日本学生支援機構に申請した後、所属大学の提携大学に留学生として半年から 1 年間送り出す制度である。留学先の B 大学は、1946 年に創設された総合大学で、現在、26,000 人の学生が在籍しており、その内、1,500 人は 97 カ国からの留学生である。現地で、留学生は語学学習を目的とした IELP (Intensive English Language Program) に所属することになるが、一定レベル以上の成績を修め、アカデミックアドバイザーから推薦があった場合は、大学の正規の授業を受講する権利が与えられる。C は、留学

直後のプレイスメントテストにより、4技能を修得する4つのクラスでトップから2番目のクラスに配属されたが、留学開始から3ヶ月目の2学期目から、正規のクラスとIELPのクラスを同時に受講していた。Cは渡米時、2回生終了時にあり、3回生の2月に帰国している。A大学が提供する認定留学の形で留学したため、現地で修得した授業単位は、日本の所属大学の単位として認定された。尚、Cは高校中退後、社会人を2年間経験し、大学検定試験を受験した後、大学に入学したため、渡米時の年齢は22歳であった。2歳の時にグアム、14歳の時にサイパン、17歳の時に韓国に旅行した経験があったが、いずれも1週間の滞在であった。尚、留学するまでは、Cの所属大学の英語担当教員であった2名のネイティブ・スピーカー以外で外国人との接触はなかった。

## 2. 調査方法

今回の調査で用いた方法はPAC分析と呼ばれる手法である。PACとはPersonal Attitude Construct（個人別態度構造）の略で、個人別に態度構造を測定するために開発された手法である<sup>20)</sup>。この手法は、半構造化面接と比べて、調査対象者の内面に深く触れられると同時に、クラスター分析を用いることで、個人の体験の構造をより深く捉えることができるメリットがある。異文化接触は複雑な心理過程を伴うため、この手法はアイデンティティの形成をテーマとする本研究には最適であると判断した。ここで、明示しておきたいことは、PAC分析は、一般的な実験や調査により平均値としての人間(行動)を解明することを目的としている法則定立的な研究法とは異なり、人間を「自身の行動を意味づける存在」と見なし、個人を全体的に捉えようとするホリスティック(holistic)な観点に立つ研究法であることだ。本研究における対象者は1名であるが、「人間はそれぞれに独自の世界を持つ異質な存在である」というこの分析法の鍵概念に従えば、唯一無二の対象者を研究の対象とすることには、十分な研究価値が存在すると考えられる。

分析に使用されるデータは、調査対象者が留学する直前の2010年2月と留学中の8月、そして、帰国直後の2月と3月に筆者が実施した調査に基づいている。調査は、留学前、留学中、帰国後の各2回ずつ、計6回実施された。留学前と帰国後については筆者の大学の研究室で実施し、留学中の調査については筆者が留学先である現地に赴き、B大学の学生センターのラウンジで実施した。まず、「あなたは、留学についてどのようなイメージをもっていますか。頭に浮かんできたイメージを単語レベルでも文章レベルでもかまいませんので、思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入して行ってください」という刺激文を口頭で与えると同時に、紙面に書かれたものを対象者に見せた。他のキーワード（自分自身、日本・日本人、アメリカ・アメリカ人）についても、同様の手続きを踏んだ。また、調査対象者の許可を得て、インタビュー部分を録音し、分析のためのテープ起こしを行った。すべてのインタビュー調査に要した時間は約15時間であった。統計分析にはSPSS Version. 18を使用した。

「イメージ」の定義に関して、広辞苑<sup>21)</sup>によると、「イメージ」は見たり聞いたりしたことが基になり、意識の中に現れてくる像や姿、心象を意味している。ボールディング<sup>22)</sup>は、イメージとは個人の過去の経験の産物であり、ある刺激を受けることによって大きく変化したり、漠然としていたものが明白化したり、さほど変化しなかったりすることもあると指摘している。また、基礎心理学および認知心理学的見地から、水島と上杉<sup>23)</sup>は、イメージとは「自己意識的に気づいている準感覚的または準知覚的経験、対象が実在しなくても存在しているもののように経験する認知事象」とし、知覚像が何かの対象(モノ)の刺激によって作られるのと同様に、イメージも何らかの刺激により形成されたり、喚起されたりすることを指摘している。そこで、本稿では、イメージを「感覚や知覚を通じて、過去に自分自身が体験したものや、その他の情報源から獲得したものから形成され、新たな刺激を受けることにより変化しうるもの」と定義する。尚、本稿では、紙幅の関係上、提示した4つのキーワードのうち、「留学」と「自分自身」というキーワードに対する調査対象者のイメージの変化を探索する。

## V. 結果

以下では、本稿で着目する2つのキーワード、各々に関し、留学前、留学中、帰国後のイメージの変化をクラスター分析により得られた樹形図と、インタビュー中に調査対象者から報告された本人の言説により報告する。

### 1. 「留学」に対するイメージの変化について

#### a. 留学前の結果

図1は留学前の分析結果である。ここでは各々10項目からなる2つのクラスターが出現した。

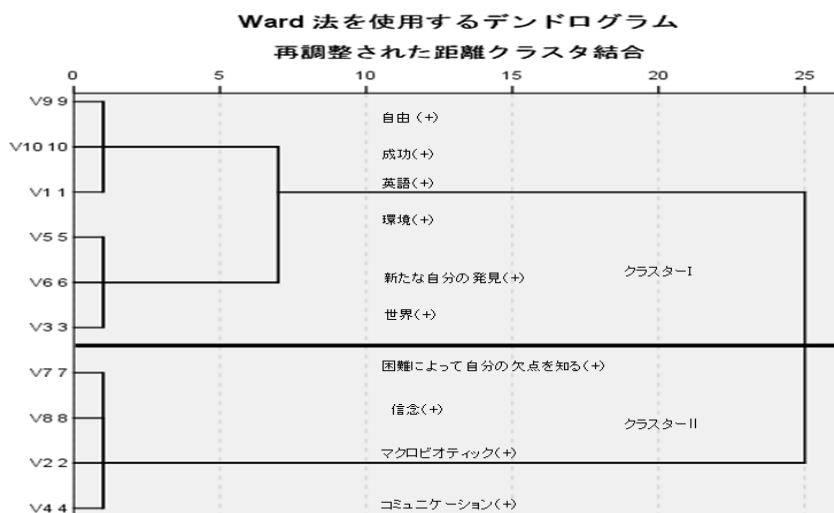


図1. 留学前:「留学」に対するイメージ

### a-1. 調査対象者Cによるクラスターの解釈

#### a-1-1. クラスターⅠについて

クラスターⅠは、「自由」、「成功」、「英語」、「環境」、「新たな自分の発見」、「世界」の6項目から構成されている。このクラスターに対する全体のイメージについて、Cは「自分が今後、進んでいく方向性を指している言葉の集まり」とであると述べた。ここでは、自分の夢を現実化させる計画、自分に必要だと思うもの、普段から考えていることが集約されているとのことであった。

まず、「自由」という言葉に関して、留学には常識にとられない仙人のイメージがあるという。「自分自身はもちろんのこと、自分の周囲の人たちを含めた周りの『環境』を同時に良い状態にもっていくことが可能となった時、真の意味で『成功』を収めると言える」とのことだった。つまり、ここで言う「成功」とは、自分自身の内側だけで完結するミクロな視点に立った「成功」ではなく、他者も含め、楽しく、より調和のとれた状態に導くことのできる自分が存在して初めてマクロな視点からの成功という言葉がついてくるという。「環境に自分を合わせることは、自分を殺すことを意味しておらず、逆に自分を活かすことになる」とCは語った。他方、Cは「英語」は、より現実的に、上記のような成功をおさめるための手段であると捉えていた。言語学習は人間の歴史、文化を理解するために必要なものだが、とりあえずは、現地で出会った人とのコミュニケーションが優先順位と考えていた。また、「新たな自分の発見」は、自分探しに通じる言葉である。自分の常識や社会的な立場とは関係なく、自分の願望や本心を否定することは、自分の命そのものを否定することに繋がる。しかも、自分の願望は、必ず、自分以外の人たちも良い状態になることに対する願いも含んでいる。そういった意味で「環境と調和することは、人間の道であり、人間的に成長をもたらす」との理解であった。最後に、「世界」という言葉から来るイメージは、マクロな視点からみた自分と関係があるという。人というのは、成長するほど視野が広がる。つまり、それは、様々な視点と調和をとるということにより、偏りをなくすことに繋がり、宇宙の一部である自分が状況に応じて自由に変化するというイメージがあるとのことであった。

#### a-1-2. クラスターⅡについて

クラスターⅡは残りの4項目の「困難によって自分の欠点を知る」、「信念」、「マクロピオティック」と「コミュニケーション」からなる部分であり、このクラスターから感じる全体のイメージは「感謝の気持ち」であった。

まず、「困難によって自分の欠点を知る」について、これまでCは、自分の長所を伸ばすことが自分を活かすことだと考えてきたが、今は、むしろ、自分の欠点だと思われることを伸ばしていこうと考えていた。長所だけを伸ばしていくことは、実は、自分が楽をしたいという気持ちから来るものであり、欠点を見ない傾向が強すぎると偏りが生じる。欠点を欠点として捉えず、すばらしいものに変えていくことにより、長所とのバランスがとれる。これこそ、現在、自分が真に

望んでいることであることにCは気づいていた。Cは留学の3年前から、マクロビオティックを実践していたが、「信念」は、彼がマクロビオティックを始めた頃に抱いたもので、哲学的、概念的なものだという。この「信念」により、周りとは異なる自分というものを確立することができたとのことであった。また、クラスターⅠの内容との関連から、自由になるためには、いったん、自分の周囲の常識から解き放たれて、自分に頑固になる必要があるとCは語った。「マクロビオティック」は、彼の人生を大きく変えた存在であり、その出会いによって、心身共に健康になり、夢をもつことができるようになった。ここでは、マクロビオティックのホリスティックな視点に導かれ、この世に生まれた意味を追求していきたいとの願望がここでは語られた。最後の「コミュニケーション」は、人間関係の調和を導く要であるという。人間は互いに助け合って生きており、社会で生きていくということは、人間として成長していくことを意味する。ここでは自分も他者もバランスがとれた状態が、個人の成長を促すという考えが示された。

#### a-2. 総合的解釈

以上から、クラスターⅠについては、「今後自分が進むべき道と決意」、クラスターⅡについては、「新たな挑戦を支える自分の確信」と命名できよう。図1が示すように、Cはすべての項目にプラスのイメージを抱いており、今回の留学に積極的な姿勢で臨んでいたことが示されている。今回の留学から遡る1年間、筆者は担当授業を通じてCと接触があったが、Cが物事を深く考える哲学的な感性の持ち主であると感じていた。インタビューは、そのような彼の人となりをより深く知るきっかけを与えてくれた。彼が留学前、「留学」に対して抱いていたイメージは「環境」が大きなキーワードとなっていた。マクロビオティックの実践により築かれた信念は、一般の常識とはかけ離れたところに存在するものであると自覚しながら、自己を解放するためには、一端、自分の信念に頑固になり、自己の内面を探求する必要があるとCは感じていた。彼は、将来、自分の人生を良い方向に導いてくれたマクロビオティックに関わる仕事につくことを希望しており、米国への留学はその思いを実現するためのものであった。ここで、留学は、当時のCの環境を大きく変え、人間的な成長の牽引となるものと捉えられている。重要なポイントは、個人の成長や成功はその個人の中でだけで完結するのではなく、他者をも同様に幸福にするものでなければならないという彼の価値観が示されたことである。これは、バランスを核とするマクロビオティックの中心的概念に通じる考えであり、マクロな視点からの成功を強調する彼の意図はここにある。Cはクラスター全体のイメージについて、Ⅰは陰性、Ⅱは陽性のイメージがあると指摘したが、これは、まさしくマクロビオティックの本質に触れたコメントである。「陰」は「広がり」、「外側」、「空間」、「上向き」といった宇宙の外側に向かって動く力を示し、「陽」は「集中」、「内側」、「時間」、「下向き」のような中心に向かって動く力を示している。すなわち、前者は彼にとって今後自分自身が進むべき道を暗示しており、後者は、留学という新たな挑戦を支える彼の確信を示し



ていたと考えられる。

#### b. 留学中の結果

図2は留学中の分析結果である。ここでは10項目からなる2つのクラスターが出現した。Cが報告したクラスター全体のイメージは、「自分は周囲の人に支えられている」であった。



図2. 留学中：「留学」に対するイメージ

#### b-1. 調査対象者Cによるクラスターの解釈

##### b-1-1. クラスターIについて

クラスIは「固定観念を取り除く」、「今までの人生経験の整理」、「文化に対する理解」の3項目から構成されていた。ここでは、留学をすることにより、自分がその時まで築いていた先入観を取り除いて、様々なことを見ることの必要性を感じたことが語られた。文化に対しても、固定観念を持たずに新しい視野で見ようと努力することで、留学中の体験に対する理解がより深まりつつあるとCは感じていた。また、留学を通じて、今までに経験したことのない文化に対する理解を深めることで、過去の自分の経験をより明確で広い視野から俯瞰的に見つめ直すことができたと言った。

##### b-1-2. クラスターIIについて

クラスターIIは「人間関係」から「外国語の学習」までの7項目からなっている。留学中、Cを支えてきたのは、米国滞在中にできた友人との関係であり、それは、彼の人生にとって、大き

な位置を占めているという。個人としての違いや文化の違いから生じる友人たちとのトラブルを通して自分の視野が広がり、今まで自分が他人に話せなかった気持ちを話したりすることで、これまで、自分の中に隠れていた新たな自分を発見したという。友人との交流を通じて新しい人生経験を積むことが内面的成長を促し、心の柔軟性も養われたとのことであった。

## b-2. 総合的解釈

上記の結果から、クラスターⅠは「過去から現在へー新たな視点の獲得」、クラスターⅡは「周囲の人々のサポートと新たな自己発見」と命名できよう。図2が示すように、Cはすべての項目についてプラスのイメージを持っていた。「今、経験しているこれらの学びを通して、時折、そういう風な整理が自然にされていって、さらにじぶんの価値観とか、自分の内面を深く掘り下げるということを時々しながら、自分の経験を消化しているという流れでつながっている」という発言は、留学後に獲得した学びは、過去から切り離されたものとして存在するのではなく、過去の経験や自分の価値観について、今、一度、振り返り過去と現在を統合することにより得られたものであることを示唆している。また、Cは留学前に、ある特定の文化的背景をもつ人々に対してある種の先入観を抱いていたが、彼らとの交流により、彼らの行動の背後にある権威主義、強い宗教観と民族意識といった価値観を理解することができたと述べ、ステレオタイプからの脱却に成功している。Cは留学前の自分を振り返り、自身のなさや不安、恐怖心の持ち主であったと語った。そして、彼の自身のなさを払拭し、励ましてくれたのが、まさに、前述の文化出身の年上の留学生であった。インタビューでは、Cはこの留学生の生き方に多大な影響を受けたことを語った。このように、自分が文化的に多様な人々との交流を通じて、日本に留まっていたは体験できなかったと思われる新しい経験にチャレンジすることで、新しい自分や新しい自分の可能性を見出すに至っている。そして、それをすべて可能にしてくれたのが、これまで自分を支えてくれた人々の存在であったという。彼らに対する感謝の気持ちを次のように述べている。

「留学は、今回の留学は僕にとって、いろんな不思議な出会いを通して、自分の歩んできた道が、自分の目的に向けたすべて経験だったという繋がりが見えてきて、自分の今から歩いていく道が、よりはっきりと見えてきたという経験になっています。または、自分を今まで支えてくれた人に対する感謝。離れることによって、より昔の自分というのが見えてきて、見えていなかった周りのサポートとか。」

Cは留学を通して、過去の経験と現在の経験とを心の中で消化し、それらの繋がりを発見し、将来の進むべき道を明確にすることができた。上記は、今回の発見は周囲の人たちのサポートに支えられてこそ実現したことであることを、Cが十分に自覚していたことを窺がわせる言葉である。

### c. 帰国後の結果

最後に、図3は帰国後の分析結果である。ここでは10項目からなる2つのクラスターが出現した。

Cが報告したクラスター全体のイメージは、「留学は新しい自分の人生をスタートさせるための非常に良いきっかけをもたらしてくれた」であった。

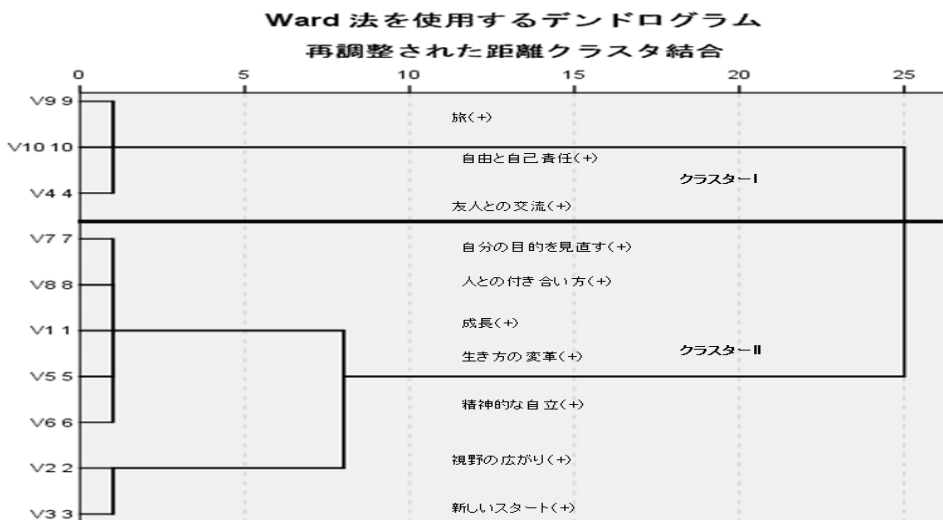


図3. 帰国後：留学に対するイメージ

#### c-1. 調査対象者Cによるクラスターの解釈

##### c-1-1. クラスターIの解釈

クラスIは「旅」、「自由と自己責任」、「友人との交流」の3項目から構成されている。Cにとって、人生は旅になぞらえることができるという。日本にいた時は、自分が旅をしているという認識を得ることはなかった。しかし、海外に出て、一人の人間として様々な事態に対処しなければならない状況になり、自分自身の人生について考える機会を得ることができ、自分自身に「責任」とするという自覚が芽生えたという。旅には、リスクがつきものだが、日常の安定の中では視野を広めることが難しく、自己の成長も望めない。旅をし続けることで、新しい学びがあり、挑戦ができ、視野をさらに広げることができると考えていた。また、海外経験の豊富な現地の「友人との交流」によりその思いはますます強まった。

「僕の希望なんですが、旅をし続ける。常に新しい場所とか、それは意識のうえでも新しいことを学ぶ。新しいことに挑戦していく。それが視野を広げていくことにつながるだろうし、成長していくことに繋がると思うので、そういう姿勢が大事なんだと。友人を見ても、海外の

友人も非常に視野が広いですね。競争が激しいです。皆、勉強しています。色々なところを旅行して、実際に、あの、旅をしています。そうすると、やっぱり、そういう友達の話の聞くといろんな価値観に接しているので、あ～、この人は広い視野をもった考え方をされていて、心が柔軟でたくさん友達がいて、また、素晴らしい人生を生きてるなど感じたことがすごくためになりました。」

#### c-1-2. クラスタⅡの解釈

クラスタⅡは、「自分の目的を見直す」から「新しいスタート」までの7項目から構成されている。Cは、今回の留学は自分の人生の転機になったと語った。新たな人との出会いによって、新しい経験と新しい価値観に出会ったことで、本当に自分がやりたいこと、本当に自分が生き生きと生きることの大切さを認識することができたという。それは、彼が暮らしてきた日本社会では決して見つけることができなかつたあらゆる常識や概念に縛られない「生き方の発見」であった。たとえ、リスクを負ったとしても、挑戦したいという姿勢が精神的な自立をもたらし、自分自身をより深く知ることに役だったという。また、自立を目指しながらも、良い意味で他者と相互依存の関係を維持することの大切さを自覚したことで、周りの人との「付き合い方」にも変化があったことを指摘した。

#### c-2. 総合的解釈

上記の結果から、クラスタⅠは「人生は旅、挑戦の場」、クラスタⅡは「人生の転機をもたらした人々との出会い」と命名できよう。留学に先立つ1年間、筆者は主に授業を通じてCと交流があった。授業内外で見せた彼の落ち着いた様子からは想像できないことだったが、今回のインタビューで、留学するまでCが自信のなさや不安、恐怖感を日々、抱いていたことを筆者は知った。「人生は旅である」という表現の真実を彼はまさに今回の留学で実感することになる。ここでいうCにとっての旅とは、親しみ慣れた元の自分の居場所から物理的に離れる意味と、これまで抱いていた社会の常識に捕われた固定観念からの脱却することの両方を意味していた。そして、彼に「自分の人生の目的を見直す」きっかけを与え、「生き方の変革」をもたらしたのは、友人を含め、様々な人々との出会いであった。留学前、彼には多くの友人がいたが、それは「自分の独りよがり」であったという。留学の地で新たな友人関係を構築することにより、Cはそのことに気づくことになる。

「そうですね。はい、友人関係の在り方が変わりましたね。。。(留学前も)友人、たしかに、たくさんいたんですね。いたんですよ。。はい、それでも、僕としては独りよがりだったんです。何でも、当時は自分自身を確立したいという意識が強くて。自分自身を確立したいという意識が強くて。自分自身の考え方とかを優先しよう、しようしていたので。人の話をよく聞く

ということでも、あまり、聞きたくなかったんです。。だから、バランスですよ。人の話を聞かないときは聞かない。だけど、取捨選択できるようになった。前はできなかったんですね。

前は、影響される、影響されるって思ってたから、取捨選択する余裕もなくて。」

留学前、Cは他人に依存しないことを信念としながら、自己を確立することに焦りを感じていた。しかし、自己を確立するとは、決して、一人で実現できるものではなく、周囲の人との調和ある関係により成り立つことを留学を通じて彼は知る。留学はまさしくCに「視野の広がり」をもたらした。彼は日本にいる大学の友人たちよりも2年遅れて大学生活をスタートさせていた。留学前は常識からはずれることへの恐れや年齢に纏わる心配もあったとのことだったが、留学によりこのような考え方そのものを捨て去れたことは彼の人生の大きな転機となったに違いない。そして、やがてこのような価値観は「人との付き合い方」にも変化を与え、「本当の意味での助け合いの人間関係」の重要性を実感するに至ったものと思われる。

## 2. 「自分自身」に対するイメージの変化

### a. 留学前の結果

図4は留学前の分析結果である。ここでは10項目からなる3つのクラスターが出現した。

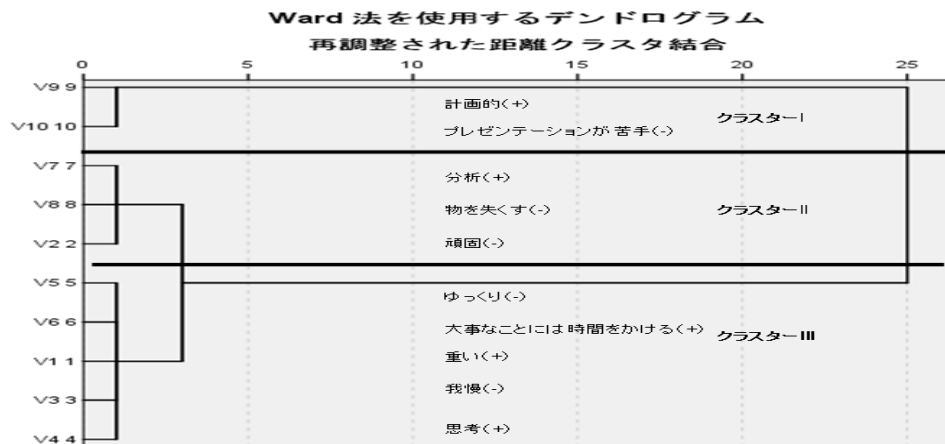


図4. 留学前：自分自身に対するイメージ

#### a-1. 調査対象者Cによるクラスターの解釈

Cが報告したクラスター全体のイメージは「自分は左脳タイプ」であった。

##### a-1-1. クラスター I について

クラスター I は「計画的」と「プレゼンテーションが苦手」の2項目から成り立っている。人

前でプレゼンテーションをする際は、相手の反応によって話題を変えたり、雰囲気盛り上げたりするなど、臨機応変にあたる必要がある。しかし、自分自身は何事も計画に沿った方法を踏襲するため、柔軟性に欠けることが短所であると感じていた。そのため、プレゼンテーションに対する苦手意識があるとのことであった。

#### a-1-2. クラスタⅡについて

クラスタⅡは「分析」、「物を失くす」、「頑固」の3項目で構成されている。ここでは、自分の性格は、頑固で視野が狭い。判断が浅く、自分の思い込みで事を進めてしまうため、取りこぼしをし、「物を失くす」ことが多いという。調子の悪いときでも、よく考えずに、思い込みで分析する傾向がある。このクラスタは「マイペースで自分の周りを見ない傾向」を示しているとのことであった。

#### a-1-3. クラスタⅢについて

最後に、クラスタⅢは「ゆっくり」、「大事なことには時間をかける」、「重い」、「我慢」、「思考」の5項目から成り立っている。マイペースで、自分で思考を積み重ね、人の話のウラを知りたいと常に思っている。物事に対して重みを求め、自分で考えて納得しなければ、自分のものにはできないと考えている。大器晩成型で、手堅く時間をかけて、着実に土台を作るタイプで、一番大事なことははずさないというイメージを持っているとのことであった。

#### a-2. 総合的解釈

上記の結果から、クラスタⅠを「課題に対する自分の傾向」、クラスタⅡを「周囲を見ないマイペースな自分」、クラスタⅢを「沈思黙考型」と命名する。図4で示されたように、ここでは自分自身に関して、プラスのイメージとマイナスのイメージが拮抗している。Cは、頑固で柔軟性に欠ける点が自分の性格の短所であると自覚しており、それが人とのコミュニケーションにマイナスに働いていると感じていることがインタビューから伝わってきた。一方、時間をかけて、慎重に物事を深く考える傾向は長所と捉えていることが理解できた。Cはクラスタ全体のイメージを「自分は左脳タイプである」と表現している。それ自体を否定しているわけではないものの、深い思考がプレゼンテーションのスキルも含めて、人とのコミュニケーションに災いしているとの意識が当時の彼には働いていたものと思われる。この二つの異なった自己の側面で揺れ動く様子から、自我の混乱を経験している様子が窺がえた。

#### b. 留学中の結果

図5は留学中の分析結果である。

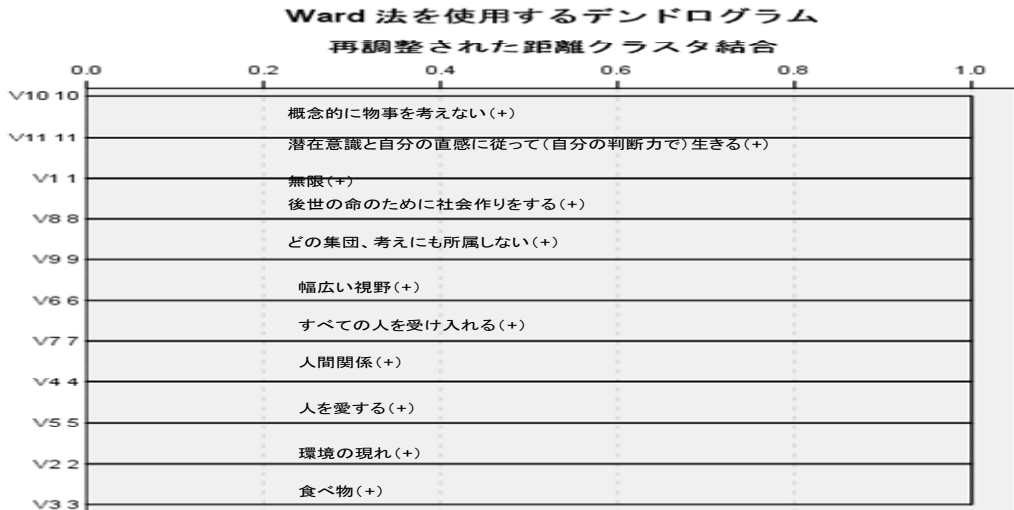


図5. 留学中：自分自身に対するイメージ

#### b-1. 調査対象者Cによるクラスタの解釈

ここでは、クラスタによる結節は見られず、全11項目が1つの纏まりとして現れる結果となった。全体のイメージとして、Cは「自分は無限である。いかようにでもなれる。すべての人は無限である、無限の現れである。我々は皆、1つのところからやってきた兄弟である。命はすべて、1つのところからやってきた」と表現し、このような理解が、自らの生き方や生きる目的というものを明確に認識させてくれたとのことであった。「概念的に物事を考えない」とは、社会規範やモラルを気にせず、「潜在意識と自分の直感に従って自分の判断力で生きる」ことを意味している。また、留学後、自分は環境によって生かされていること、人間は環境の変化に合わせて無限に変化する存在であることを実感したという。そして、食べ物を正すことで、自分がマクロビオティックを実践するまで抱いていた思い、偏った食べ物をとることによって生まれた妄想や環境に対するゆがんだ認識をクリアにすることができたと語った。そして、Cは幅広い視野に立ち、「すべての人を受け入れられる」人になり、マクロビオティックを通じて「後世の命のために社会作り」をしたいとの思いを語った。

#### b-2. 総合的解釈

上記の結果により、全体の纏まりを「人生の目的に対する明確な認識と感謝の気持ち」と命名する。インタビューで明らかに感じられたことは、Cが人生の目的と今後自分が進むべき方向というものを明確に認識していたことである。自らマクロビオティックを実践するだけでなく、彼は、将来、マクロビオティックを通じて、教育者になりたいと考えていた。60歳を超えるぐら

いになって、自分がそれまでに培った人生観、宇宙観、命に対する理解を食というテーマを通じて後世の人々に伝えたいという夢をもっていた。中国古代思想の中核をなす陰陽思想は、いわば、バランスの哲学である。あらゆる先入観から解き放たれ、幅広い視野で「すべての人を受け入れる」姿勢が求められる。Cは、留学する3年前からマクロビオティックを実践しており、大学入学前の2年間、マクロビオティック関係の職場に勤めた経験があった。それが彼とマクロビオティックとの出会いであった。インタビュー中、Cは「人を愛するということは、感謝の心を持つということであり、生きることに對して感謝をする意味である」と語ったが、それは、とりもなおさず、マクロビオティックとの出会い、そこに導いてくれた師への感謝の思いを表していた。

「社会的に十分な経験を積んだ後に、自分がそれまでに培った人生観、宇宙観、命に対する理解というのを。。。伝える、要するに、いわゆるマクロビオティックを理解した後に、それを後世の人々に伝えていきたい。他の人がそれを理解する手助けをしたい。その準備のために、自分がまず、理解する。自分を限定せずに、幅広い視野で生きたい。。。すべての人を受け入れるというのは、全ての人を愛するというので、無限の宇宙から生まれてきた同じ兄弟姉妹だから、肌の色や考え方の違いとか、宗教観の違いとかによって人を限定して、こうだと決めつけて対立したりはしないということです。。。」

上記のことを悟るきっかけを与えてくれたのは、まさに今回の留学であった。Cは、留学して数ヵ月後、自然豊かな街を歩きながら、「あ～、自分は後世の命のために役に立ちたい、これから生まれてくる命がより充実した人生や経験をこの地球ですることができるように、やらなければいけないことがたくさんある。自分はその役に立ちたい、そのために、生きているんだ」と思ったという。今回、インタビューで挙げられた全項目はプラスのイメージであり、プラスとマイナスのイメージが拮抗していた留学前のイメージとは大きく異なっていることから、Cの自分に対する自信を感じとることができ、自我の確立に向けて大きく一歩前進していることが理解できた。

### c. 帰国後の結果

図6は帰国後の分析結果である。ここでは10項目からなる2つのクラスターが出現した。

#### c-1. 調査対象者の解釈

Cによると、クラスター全体のイメージは、「留学を終えて、以前と変わった自分自身に対するイメージで纏まっている」とのことだった。

##### c-1-1. クラスターIについて

クラスターIは、「少しずつ成長している」、「わが道を発見し、突き進みたい」、「人に説明するのが得意」の3項目から構成されている。Cは、ゆっくりだけれども、一歩ずつ人生を歩いてい



るといふ実感があるという。彼を感じる成長の一端は、留学前に比べて、物事に容易には動揺せず、以前よりも楽観的になったという。また、今後の人生で何が起ころうとも、冷静に対処できるといふ人生そのものに対する信頼が備わったとのことであった。そのような思いを抱きつつ、自分自身の価値観をよく見極めたうえで、自分の道を進んでいきたいとのことであった。

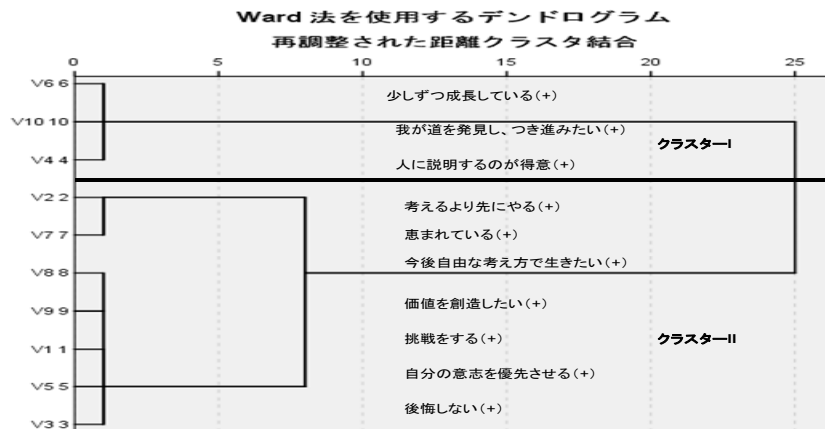


図6. 帰国後：自分自身に対するイメージ

#### c-1-2. クラスタIIについて

クラスタIIは、「考えるより先にやる」、「恵まれている」、「今後、自由な考え方で生きたい」、「価値を創造したい」、「挑戦をする」、「自分の意志を優先させる」、「後悔しない」の7項目から構成されている。リスクを恐れて、考えすぎていては最初の一步は踏み出せない。アクションを起こしながら、チェックするというPDCAサイクルが目的達成の秘訣だという。Cは、人と異なる人生を歩みたいという願望があり、自分の判断で生きることによってリスクを負うことは厭わない、失敗も恐れていないと語った。今後は、留学経験を踏まえて、挑戦をしたいと考えており、経済的自立は大切なことであるため、ビジネスを通じて、多くの人々が認めてくれる価値を創造したいとのことだった。

#### c-2. 総合的解釈

上記の内容から、クラスタIは「自己評価と将来に対する確認」、クラスタIIは「今後の生き方に対する意気込みと覚悟」と命名できよう。留学を通じて、私生活のうえでも仕事のうえでもマクロビオティックを追及していきたい、という彼の人生の目的は明確化された。2度目のインタビューから半年を経たこの時点では、将来に対するより具体化された覚悟といったものが感じられた。Cは留学を終え、自分自身に起こった変化を冷静に分析している。それは、「少しずつだが、成長している自分」であり、「人生を信頼し」、何が起こっても「楽観的に」「冷静に対処

していける」自分自身がいた。留学前、留学中、帰国後のインタビューを比較して、自分自身のイメージに対して、何か違いを感じるかと尋ねたところ、彼は次のように述べた。

「一番大きいのは、今、自分がいる立ち位置がスタート地点に立っているということなんです。今、スタート地点に立っているという立ち位置に自分がいるんで。。心境ですよ。それは、それがぜんぜん違いますね。あと、リスクを自分でとるという覚悟ができてきているということですよ。あの一、これから歩み始めるという感じでしょうか。そういった点でぜんぜん違います。」

インタビュー中の彼の諸々の言説からは、人生に対する肯定感を維持しつつ、自分の意思で挑戦を続け、後悔なく人生を送りたいという意気込みが感じられた。

## VI. 考察

ここでは、今回の調査結果の総合的考察として、まず、エリクソン<sup>6)</sup>とミード<sup>7)</sup>が自我と社会との関係をどのように捉えていたのかについて詳述した後、それらを基に調査対象者Cに起こったアイデンティティの変容について考察する。

エリクソンは、自我心理学の問題点は、個人の自己の内部、すなわち、内界 (inner world) と、それ以外のすべての曖昧な領域であるところの外界 (outer world) とを分離してきたことであると指摘している。彼が主張する「アイデンティティ」の特徴は、文化的・社会的・歴史的環境のなかでのみ生きることができる「自我」における「内面」と「外面」との相乗関係 (a mutual relation) として捉えていることである。人間にとっての「環境」とは「他者」である。すなわち、自我の内側と外側とが「相対的＝関係的」である限り、「自我の発達」とは、同時に「自我にとって重要な意味をもつ他者」の「発達」でもなければならぬことにある。自我発達だけを切り離して独立に扱うことはできず、常に、自我が相手とする「意味ある他者」の変化を通してのみ語られる。それは同時に、幼児期から積み重ねられてきた複数の「アイデンティフィケーション」を新しく組み直す仕方で、「自分は何者か」を決める問いでもある。

一方、ミードは、社会は自我に先行して存在し、自我は社会から生まれてくると考えるべきであると主張する。彼は自我の孤立説を否定し、自我の社会説を提唱することで、人間の自我が「他者」との関わりの中で社会的に形成されることを明らかにした。ミードによれば、人間の自我は、親兄弟、遊び仲間、先生など、「意味ある他者」(significant others) と呼ばれる人々の役割、態度、期待等を取り入れるという「役割修得」(role-taking) により形成される。子供は成長とともに、他者の様々な期待に直面し、複数の他者の多様な期待を組織化することで一般化する必要性を自覚するようになる。上記のプロセスを通じて生まれるのが、「一般化された他者」(generalized other) であり、この「一般化された他者」の期待を取得することにより、最も発達した自我に到達することができる。ここで着目すべき点は、ミードが上記の内容を子供のみならず、大人の自我の形

成と変容についても適用していることである。つまり、ここでいう他者とは、家族や遊び仲間だけではなく、コミュニティ、国民社会や国際社会にまでその範囲が拡大される。そして、空間的に拡大されることはもとより、時間的にも拡大されることで、より大きな社会と結びついた自我が形成されることになる。

今回の調査では、留学前、留学中、帰国後の「留学」と「自分自身」というキーワードに対するイメージの変化をもとに、調査対象者Cのアイデンティティの変容を探索した。インタビュー中のCの発言にもしばしば見られたが、ここでは「環境」が重要なキーワードとなっていた。例えば、「留学」に対するイメージを表す内容に関して、「環境」、「世界」、「人間関係」、「友人との交流」、「人との付き合い方」といった項目が、また、「自分自身」に対するイメージを表す内容については、「人間関係」、「人を愛する」、「すべての人を受け入れる」、「環境の現れ」といった項目がクラスター分析によって出現した。前述のように、エリクソンは人間にとっての「環境」とは「他者」であるとし、また、ミードは、他者とは家族や遊び仲間だけではなく、コミュニティ、国民社会や国際社会にも及ぶと指摘している。さらに、エリクソンは発達の視点から、「自我の発達」、すなわち、アイデンティティの発達とは、同時に「自我にとって重要な意味をもつ他者」の「発達」でもなければならぬと主張した。

上記の視点は、Cが留学前の「留学」に対するイメージの1つとして挙げた「成功」という言葉の意味するものに通じる見方である。なぜならば、彼が意味した成功とは「自分自身はもちろんのこと、自分の周囲の人たちを含めた周りの『環境』を同時に良い状態にもっていくことが可能となった時、真の意味での『成功』」であり、自分自身の内側だけで完結しないマクロな視点での成功を意味していた。また、Cは「環境に自分を合わせることは、自分を殺すことを意味しておらず、逆に自分を活かすこと」であり、「環境と調和することは、人間の道であり、人間的に成長をもたらすこと」だと考えていた。このように、「環境」というキーワードが、留学を直前にした彼にとっての既に重要事項となっていたことが理解できる。但し、この時点では、まだ、国際社会や文化といった広義での「環境」は含まれてはいなかった。この点で、エリクソンが指摘した「文化的・社会的・歴史的環境のなかでのみ生きることができ『自我』の『内面』と『外面』との相乗関係」は、留学前の段階では未だ確立されてはいなかったと考えられる。また、Cは帰国後、留学前の自分の状況を振り返って、友人を含め、周囲の人たちとの交流を「独りよがり」であったと表現したが、そこには、自分自身を確立したいとの強固な意識のもと、周囲の声に影響を受けることを恐れ、周囲の人々の声に耳を傾けなかったアンバランスな自分がいた。アイデンティティとは、「わたしがわたしであること」、つまり、自己を確認することである。その過程において、自己中心的になり、他者の存在を無視し、他者を自己のためだけに利用するとエゴイズムに陥ってしまう可能性が考えられるが、留学前のCはいわば、自我の混乱状態にあったのかもしれない。

一方、彼の「環境」の概念の中に、より広範囲な環境を示唆する「文化」の介入を可能にしたのはまさしく留学における経験であった。Cは文化的に多様な人々との交流、とりわけ、文化的背景を異にする友人とのコミュニケーションを通じて、新たな視点を獲得し、新しい自分や新しい自分の可能性を見出すことに成功している。それは同時に、ある特定の文化圏の人々に対するステレオタイプからの脱却をも可能にした。

他方、「自分自身」に対するCのイメージの変化からも彼自身のアイデンティティの変容をうかがうことができる。すべての項目の中で、彼がマイナスイメージを唯一示したのは、留学前のイ

表 1. 留学前、留学中、帰国後における「留学」と「自分自身」に対するイメージの分類<sup>24)</sup>

イメージの対象	留学前	留学中	帰国後
留学	自由 (+)、成功 (+)、英語 (+)、環境 (+)、新たな自分の発見 (+)、世界 (+)、困難によって自分の欠点を知る (+)、信念 (+)、マクロビオティック (+)、コミュニケーション (+)	固定概念を取り除く (+)、今までの人生経験の整理 (+)、文化に対する理解 (+)、人間関係 (+)、視野が広がる (+)、心の解放 (+)、内面的成長 (+)、新しい人生体験 (+)、柔軟性 (+)、外国語の学習 (+)	旅 (+)、自由と自己責任 (+)、友人との交流 (+)、自分の目的を見直す (+)、人との付き合い方 (+)、成長 (+)、生き方の変革 (+)、精神的な自立 (+)、視野の広がり (+)、新しいスタート (+)
自分自身	計画的 (+)、プレゼンテーションが苦手 (-)、物を失くす (-) 頑固 (-)、ゆっくり (-)、大事なことは時間をかける (+)、重い (+)、我慢 (-)、思考 (+)	概念的に物事を考えない (+)、潜在意識と自分の直感に従って (自分の判断力で) 生きる (+)、無限 (+)、後世の命のために社会作りをする (+)、どの集団、考えにも所属しない (+)、幅広い視野 (+)、すべての人を受け入れる (+)、人間関係 (+)、人を愛する (+)、環境の現れ (+)、食べ物 (+)	少しずつ成長している (+)、我が道を発見し、突き進みたい (+)、人に説明するのが得意 (+)、考えるより先にやる (+)、恵まれている (+)、今後自由な考え方で生きたい (+)、価値を創造したい (+)、挑戦をする (+)、自分の意志を優先させる (+)、後悔しない (+)

メージであった。表1にあるように、項目中の約半数がマイナスイメージを示し、その内容も自分自身の現状に対する思いで完結している。留学前のイメージが「静」のイメージを思わせる項目で満ちているのに対し、留学中と帰国後に挙げられた項目からは自分自身に対する肯定的、かつ、積極的なイメージが伝わってくる。「潜在意識と自分の直感に従って（自分の判断力で）生きる」、「幅広い視野」に立ち、「すべての人を受け入れられる」人を目指して、マクロビオティックを通じて「後世の命のために社会作りをする」という表現にもあるように、今後の生き方の方向性、生きる目的を明確化できたことで、より積極的に周囲の人々や周りの環境と関わろうとする積極的な姿勢がうかがえる。帰国後の調査でも、「我が道を発見し、突き進みたい」、「人に説明するのが得意」、「考えるより先にやる」、「挑戦をする」、「自分の意志を優先させる」など、留学前のインタビューでは見られなかった、あるいは、全く正反対の内容の項目が出現したことは、今回の留学がCのアイデンティティの再構築に関して、大きな影響を与えたことを示している。

足立<sup>25)</sup>は、留学から得られる成果・効果の1つとして、人間的成長をあげ、Chickering and Reisser (1993)のStudent Development Theory (学生の成長理論)を、留学から帰国した学生のケースに援用して、以下の7つの領域における成長について考察している：(1)能力開発、(2)感情制御、(3)自律を通して達成する自立、(4)成熟した対人関係の確立、(5)アイデンティティの確立、(6)目的の確立、(7)人格・価値観の統合。今回の調査結果に関し、調査対象者Cが特に上記の(3)～(7)の領域に関して成長を遂げたものと考えられる。

## VII. まとめ

本稿では、日本学生支援機構の「留学生交流支援制度（短期派遣奨学金）」により、1年間、米国西海岸の大学に留学した日本人留学生を対象に、「留学」と「自分自身」というキーワードに対するイメージの変化を探索することにより、調査対象者Cがいかなるアイデンティティの変容を経験したのかをミードとエリクソンの理論を基に考察した。その結果、調査対象者が留学中の様々な体験と内省を通じて、ポジティブな自己を獲得し、エリクソンが指摘した自己という「内界」と他者、すなわち、環境を意味する「外界」との相互作用、および、ミードが指摘した「意味ある他者」と「一般的な他者」との相互作用を経験することで、より確かな自我を確立することに成功したことが明らかになった。

エリクソンの「成長の8段階」に照らし合わせれば、調査対象者Cは留学当時、「成人期前期」にあったと考えられる。青年期では、「自分とは何者か」という問いや、「集団の中の自分の居場所の確保」が主要な課題となるが、成人期においては、就職、結婚や社会生活の中で、自分がどのような役割を果たすことができるかが課題となる。このことに関連して、留学前から将来、マクロビオティックの世界で身を立てようと考えていたCは、留学の地で人生の転機となった他者との交流によりその決心を確かなものにし、帰国後、今後の生き方に対する意気込みと

リスクを恐れず挑戦するという覚悟を新たにしている。いわば、留学が成人期における重要な課題の1つに対する回答のヒントをCに与えたと言っても過言ではない。佐伯<sup>26)</sup>は発達論の観点から「学び」を「自分探しの旅」と述べ、その重要性を指摘しているが、インタビューの中で、Cは人生を旅になぞらえ、「旅には、リスクがつきものだが、日常の安定の中では視野を広めることが難しく、自己の成長も望めない。旅をし続けることで、新しい学びがあり、挑戦ができ、視野をさらに広げることができる」と語っている。Cは今回留学という形で米国に旅をしたことで、人生の転機ともなる最大の「学び」を獲得したのではないだろうか。

最後に、大西<sup>27)</sup>は異文化接触において、「文化」の側面のみを取り出して、単独で論じるアプローチがとられる傾向に警鐘を鳴らし、これによって個人の発達全体の中における文化的要因の影響が不明瞭となり、研究の発展性が阻害される原因となることを指摘している。さらに、文化のようなマクロ的要因は重要であるが、個人的に経験されて初めて意味を持つものであり、アイデンティティのようなより個人の根幹に関わる内面に着目した研究の重要性が求められるとしているが、拙稿がそのような研究の一例となれば幸いである。

インタビューを通じて、Cは「感謝」という言葉を何度も口にしていた。それは、マクロピオティックとの出会いとそのきっかけを与えてくれた彼の師への感謝、現在に至るまで自分を支えてきてくれた人々への感謝など、「他者」との関わりの中で生まれた思いであった。遠い昔、米国留学を経験した筆者自身もそうであったように、困難に直面し、それを克服した時、我々が感じるのは、自己効力感と共にそれまで自分を支えてくれた人々や自分が置かれた環境に対する感謝の気持ちではないだろうか。「ライフキャリア」とは、キャリアを職業生活の範囲だけに留めず、人生において様々な役割を果たすことを通じて、広義での生き方のデザインを考えるという視点を示している<sup>28)</sup>。この意味で、個人に人生の転機のきっかけを与える留学もライフキャリアの1つと見なすことができよう。「内向き志向」が叫ばれる中、気概をもつより多くの若者たちが、リスクを厭わず世界に旅立ってくれることを切に願っている。

#### 引用文献、注

- 1) “Open doors data International students: All places of origin” Institute of International Education (2012)  
<http://www.iie.org/Research-and-Publications/Open-Doors/Data/International-Students/Leading-Places-of-Origin/2009-11>
- 2) “Country fact sheet Japan” <http://www.fulbright.jp/study/res/basic.html> 日米教育委員会資料 (2012)
- 3) 「日本人学生の留学減少 (なるほどビジネスTime) 日本人学生の留学減少」『日本経済新聞』(1月20日, 2009) p. 3.
- 4) 「アメリカ留学の基礎知識 (大学・大学院)」日米教育委員会資料 (2012)  
<http://www.fulbright.jp/study/res/t1-college03.html>
- 5) 「独立行政法人日本学生支援機構」[http://www.jasso.go.jp/scholarship/short\\_term\\_h.html](http://www.jasso.go.jp/scholarship/short_term_h.html) (2012)

- 6) エリクソン, E.H. (小此木啓吾訳): 『自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル』(誠信書房, 1973) .
- 7) ミード, G.H. (河村望訳): 『精神・自我・社会』 (人間の科学社, 1995) .
- 8) 原裕見「異文化接触とアイデンティティ問題提起にかえて」, 『異文化間教育』9 (1995) 4-18.
- 9) 箕浦康子「異文化接触の下でのアイデンティティ理論枠組み構築の試み」, 『異文化間教育』9 (1995) 19-36.
- 10) 新井郁男「日本人の異文化接触とアイデンティティ」, 『異文化間教育』9 (1995) 4-17.
- 11) 本稿では、「自我」と「自己」を明確に区別せず、相互補完的に使用する。
- 12) 茂木茂、宇留野藤雄、浅井義弘、坂入保世、河北尚夫、榊博文、渋谷正敏「滞米日本人学生の適応過程に関する研究—滞米学生の「日本」・「アメリカ」。「人間関係」。「現在の自分」に対するイメージとその変容—」『日本大学生産工学部報告』16 (1983) 79-92.
- 13) H. Sasaki, F. Uruno, M.D. Simmons, S. Mogi, H. Sakairi, P.W.Watkins, & C. Gillon: Studies in cross-cultural communication: Image changes and Japanese students, adaptation to American culture, 『日本大学生産工学部報告』20 (1987) 11-92.
- 14) 岩男寿美子、萩原滋: 『日本で学ぶ留学生—社会心理学的分析』(勁草書房, 1988) .
- 15) 葛文綺「留学生の異文化適応に関する研究—来日目的、対日イメージと適応度との関連を中心に—」, 『名古屋大学教育学部紀要(心理学)』46 (1996) 287-297.
- 16) 横須賀柳子「日本人大学生とアジア系留学生の相互イメージ変容」, 『異文化コミュニケーション』7 (2004) 159-176.
- 17) 井上孝代(代表)『世界青年の船事業における異文化接触経験への援助に関する実験臨床心理学的研究』平成11・12年度文部省化学研究費補助金(基盤C)研究成果報告書.
- 18) 末田清子: 「留学体験の意味づけ—大学生の留学前及び帰国後の滞在国に対するイメージ分析を通して—」, 『異文化コミュニケーション』4 (2001) 57-74.
- 19) 横林宙世: 「地方の小規模大学で学ぶアジア圏留学生の異文化適応」, 内藤哲雄、井上孝代、いとうたけひこ、岸太一編『PAC分析研究・実践周2』(ナカニシヤ出版, 2011) 第2章.
- 20) 内藤哲雄: 『PAC分析実施法入門(改訂版)「個」を科学する新技法への招待』(ナカニシヤ出版, 2002) .
- 21) 新村出: 『広辞苑』第六版(2008)
- 22) K.E. Boulding: “The image: Knowledge in life and society”, (University of Michigan Press Ann Arbor, MI, 1956) .
- 23) 水島恵一、上杉喬: 『イメージの基礎心理学』(誠信書房, 1983) .
- 24) PAC分析ではインタビューの中で調査対象者にカードに書いた各項目に対して、「プラスのイメージ」、「マイナスのイメージ」、「ゼロのイメージ」のいずれをもっているかを回答してもらう手順がある。
- 25) 足立恭則: 「大学学部過程における海外留学の教育的価値とカリキュラムにおける位置づけ」, 『人文・社会科学論集』28, (2010) 77-91.
- 26) 佐伯胖: 『「学ぶ」ということの意味』(岩波書店, 1995) .
- 27) 大西晶子「異文化間接触に関する心理学的研究についてのレビュー」, 『東京大学大学院教育学研究科紀要』41 (2001) 301-310.
- 28) 高濱愛、田中共子: 「派遣留学生の教育的トータルサポートシステム構築へ向けて—日本人留学生を対象とした留学前および帰国後教育プログラムの試み—」, 『ウェブマガジン「留学交流」』4 (2011) 1-11.